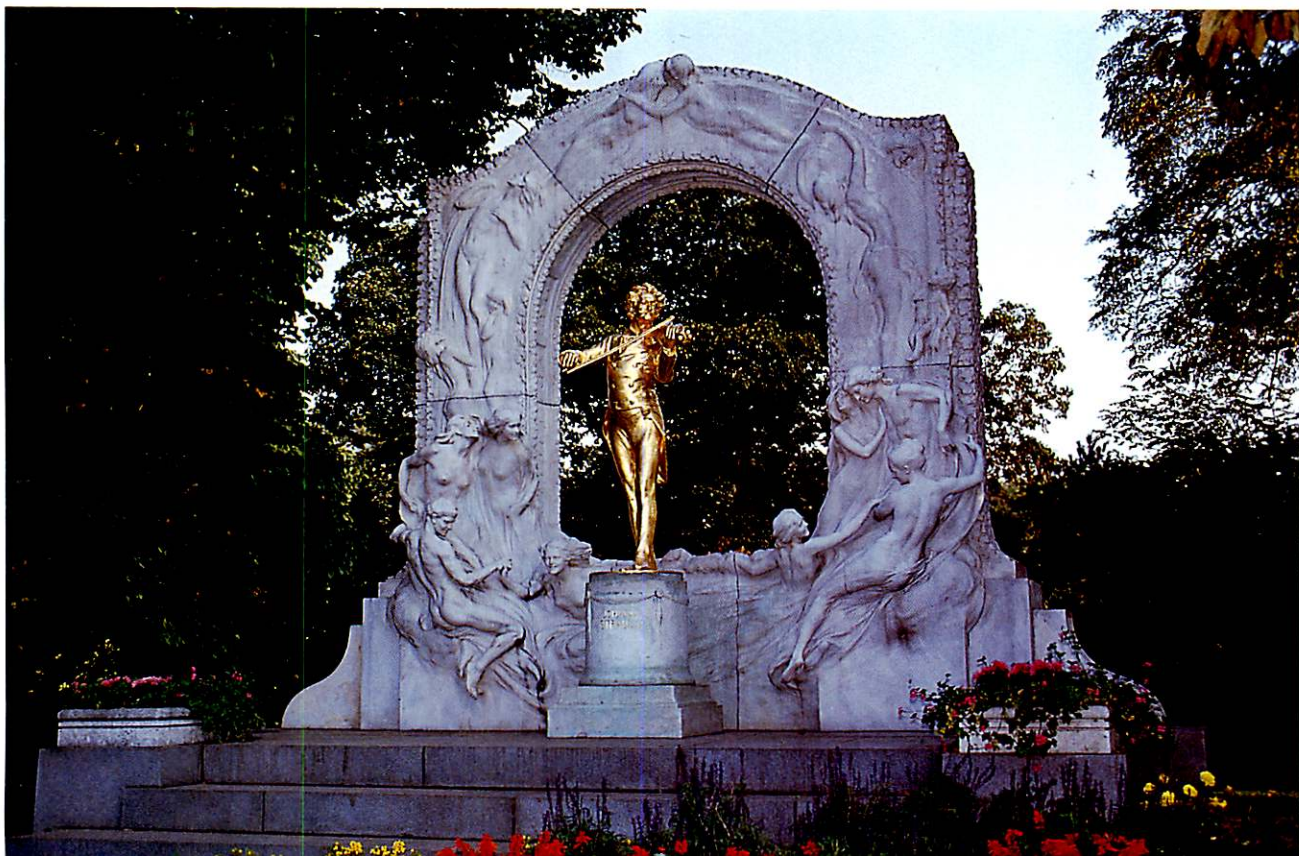


公園を 散歩する

ウィーンのアパートは、あまり日当たりの良くないものが多く、住んでいると、ストレスもたまる。そんな時に一番手軽で効果的なレクリエーションは、公園の散歩。バカにしてはいけない、太陽の力が弱い土地では、外に出て日の光を浴びることも大切な健康法のひとつなのだ。

シュタットパーク（市立公園）という名の大きなオアシスが街の中心にある。この公園が完成したのは1863年のこと。それまであったウィーンの城壁の跡地に広い環状道路（リンクシュトラッセ）を作り、国立歌劇場その他をはじめとする豪華な建造物を建設する際に、同時に設計された。公園の中央に立っているヨハン・シュトラウスの像は有名だ。

ワルツ王、そしてオペレッタの作曲家としてのシュトラウスの勢いは、21才でのデビュー以来、想像を絶するほどだった。同名の父親はこの息子を音楽家にはしたく



市立公園のヨハン・シュトラウス像

なかったらしいが、もしその希望通りになっていたら、ウィーンの大らかな魅力がひとつ減ってしまうところだった。「美しき青きドナウ」はオーストリアの非公式な国歌といっても差しつかえないほど愛されている。

公園は約11ヘクタールもの広さがあり、中央には川が流れている。兩岸はちよつとしたプロムナードになっており、古き良き時代のウィーンを彷彿とさせる、落ち着いた雰囲気の散歩道だ。

池を泳ぐ水鳥にパンくずをやる子供達、少しでも太陽のエネルギーを吸収せんとしてベンチに陣取るおじいさん、おばあさん。犬を連れた人も多く、顔見知り同志でのおしゃべりに余念がない。

新聞を読んだり、恋人に膝枕をしてもらって昼寝をしたり、ただポーツと過ごしたり……。市街の喧騒から離れて休憩していると、何となく人間らしさを取り戻せるような気がしてくる。空って広いんだなあ、などと改めて感じるのもこのような時だ。

暖かい季節になると、公園の広場で毎晩ワルツの夕べが催される。その昔ヨハン・シュトラウスが一世を風靡したように、指揮者がヴァイオリンのソロも受け持ちながらオーケストラを誘導する。

市立公園(シュタット・パルク)にある野外のカフェ



バレエダンサーによってワルツが披露されたあとは、客が踊る番だ。都会に住んでいると、土の香り、緑のつややかさ、そして風にさざめく木の葉の音などをつい忘れてしまいがちになる。でもそれでは



ベンチでひなたぼっこ

いけない。自然の音に耳を傾けてみよう。そこにも音楽がある。

● 知識//犬の話

ヨーロッパでも犬や猫は格好の



郊外の広場で犬のしつけをする

ペットとして、町中のアパートでも好んで飼われている。建物によっては契約書にペットの飼育を禁じているものもあるが、どちらかというと例外的だ。買物の時も、食料品店以外で犬を連れて入れないところはほとんどない。電車にもバスにも子供料金と一緒に乗れる。ホテルに宿泊するのも、前もって聞いてみると小さな犬の場合は問題ない事が多い。

民権を獲得しているように見受けられる。犬を鎖で繋いで飼うのは法律で禁じられ、違反すると厳しく罰せられる。繋ぐことは動物虐待なのだ。車の中に長時間閉じ込めておくのも同じで、場合によってはおまわりさんが駆けつけてくる。このように人間と共存できる犬になるためには、それなりの躰も必要だ。犬と飼い主のための講習会も多い。ここでは基本的な号令を覚え、それに従えるように犬を訓練する。



「犬は遊んではいけません」